

博士學位論文審査要旨

2022年1月15日

論文題目: The Acquisition of the English Article System by Japanese Learners
of English as a Foreign Language: Learning Noun Countability

(日本人学習者による英語冠詞システムの習得: 名詞可算性の学習)

学位申請者: 都竹 絢子

審査委員:

主査: 文学研究科 教授 赤松 信彦

副査: 文学研究科 教授 菊田 千春

副査: 文学研究科 教授 能登原 祥之

要 旨:

本論文は、日本人英語学習者が認知言語学的知見に基づく学習法を用いて名詞の可算性を学習することで、英語冠詞を適切に使用できるようになるのかを考察したものである。

第1章では、本論文の序章として、英語冠詞システムの複雑さ、英語学習者が冠詞を使用する際に直面する問題とその原因、そして認知言語学的知見に基づく学習法の可能性を指摘し、5章からなる本論文の構成、特に、第3章と第4章の実証研究の概説について述べている。

第2章では、英語冠詞システムの特徴として、限定性、特定性、総称性、可算性を挙げ、クワインの存在論的観点やヴェジビツカ概念-意味論的観点など、可算性に関する諸説について論じている。さらに、英語冠詞習得の難しさの原因として名詞の可算性判断を指摘し、英語冠詞の学習法として、認知言語学的知見である「有界性」や「個別性」の可能性について論じている。

第3章では、日本人英語学習者を対象に行った名詞可算性判断に関する実証研究について論じている。この実験では、英語と日本語、両言語間の名詞可算性判断の関係性に注目し、可算・不可算の違いによって英語名詞の日本語訳が異なる場合とそうでない場合の可算性判断に焦点が当てられた。その結果、英語名詞と日本語訳、それぞれの可算性判断には高い相関が示され、可算性判断における両言語の関連性が示唆された。また、可算と不可算で日本語訳が異なる場合、英語名詞の可算性を判断する手段として日本語訳が役立つ可能性があることを示した。

第4章では、英語名詞の可算性判断に関して、認知言語学的知見の有効性を考察した実証研究について論じている。日本人英語学習者を対象に、有界性と個別性に焦点を当てた認知言語学的学習法と、普通名詞、物質名詞など、名詞の分類に焦点を当てた従来の学習法を比較した。その結果、両学習法に高い学習効果が見られたが、当初予測していた認知言語学的学習法の優位性は認められなかった。両学習法の間に学習効果の違いが見られなかった原因として、実験参加者には既にある程度の英語冠詞に関する知識があった点、有界性と個別性という概念を理解することの難しさ、認知言語学的知見の内在化には時間がかかる可能性などを挙げている。

第5章では、本論文での成果と限界および今後の展望について述べ、認知言語学的知見を英語学習に活用する観点から、認知と言語の関連性を反映した明示的学習法や教材の重要性を示した。

第4章の研究結果に関しては、より包括的な考察が望ましいが、英語名詞の複数の素性を変数として組み込み「一般化線形混合モデル」を用いて英語冠詞の習得メカニズムを考察した点は、学位申請者の研究者としての優れた資質と豊かな将来性が十分に示されている。よって、本論文は、博士(英語学)(同志社大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2022年1月15日

論文題目: The Acquisition of the English Article System by Japanese Learners
of English as a Foreign Language: Learning Noun Countability
(日本人学習者による英語冠詞システムの習得: 名詞可算性の学習)

学位申請者: 都竹 絢子

審査委員:

主査: 文学研究科 教授 赤松 信彦

副査: 文学研究科 教授 菊田 千春

副査: 文学研究科 教授 能登原 祥之

要 旨:

上記審査委員3名は、2022年1月6日13時から、約1時間にわたり、徳照館第一共同利用室において、学位申請者に対する口頭試問を行った。

学位申請者は、審査委員からの質疑に対して、提出論文に関する専門分野はもとより、関連する諸分野の問題についても、的確かつ詳細な応答を行った。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学位申請者の学力水準の高さが確認された。

外国語（フランス語）については、口頭試問に先立って行われた語学試験により、十分な学力のあることが確認された。また、外国語（英語）については、口頭試問により、関連する研究論文や研究書の内容を的確に把握するための理解力や、データ分析に基づき考察した内容を論理的に表現するための運用力を備えていることが確認された。

学位申請者は、2022年1月15日13時から、約1時間にわたり、弘風館35番教室にて公開講演会を行い、研究成果を広く社会に発信する能力を有することも確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： The Acquisition of the English Article System by Japanese Learners
of English as a Foreign Language: Learning Noun Countability

(日本人学習者による英語冠詞システムの習得：名詞可算性の学習)

氏 名： 都竹 絢子

要 旨：

英語の冠詞システムは、冠詞システムを持たない日本語を母語とする日本人学習者にとって、習得の難しい文法項目であるとされている。その原因の1つとして、冠詞使用に影響する英語名詞の可算性について正しく理解できていない、という理由が考えられる。英語名詞には「可算名詞」と「不可算名詞」という区別があり、この2つは文法的な扱い方が大きく異なる。冠詞使用に関して言えば、不定冠詞 (a/an) と無冠詞の使用は、名詞可算性に直接的な影響を受けるため、ある英語名詞が可算名詞なのか不可算名詞なのかという区別は、英語冠詞を適切に使用する上で重要な要因となる。しかし、日本の英語教育において長年採用されてきた冠詞指導法では、「数えられる」「数えられない」という可算性の概念について十分に説明されておらず、名詞の種類（普通名詞、物質名詞、抽象名詞など）と冠詞選択の関係性を説明するのみにとどまっている。さらに、この指導法では、個々の英語名詞を「可算名詞」もしくは「不可算名詞」のいずれかに分類するような、二者択一的な区別として名詞可算性を扱っている。しかし、実際の冠詞使用において、ほとんどの英語名詞は、文脈によって可算名詞にも不可算名詞にもなり得るため、「可算名詞」「不可算名詞」というラベルを個々の英語名詞に固定することはできない。したがって、英語学習者が適切に英語冠詞を使用するためには、名詞可算性の概念を正確に理解し、可算性の判断基準を明確にしておく必要がある。本研究では、2つの実験研究を行い、母語に冠詞システムを持たない日本人学習者が、名詞の可算性を学習することで、英語冠詞を適切に使用できるようになるのかを調査した。

1つめの実験では、日本人学習者はどのように名詞の可算性を理解・判断しているのかについて考察した。実験内容は、調査者が事前に選出した英語名詞の可算性を日本人学習者に7段階（1：絶対に数えられない～7：絶対に数えられる）で評価してもらい、さらに各英単語につき、可算名詞の場合の日本語訳と不可算名詞の場合の日本語訳を用意し、それぞれの日本語訳に対する可算性についても7段階で評価してもらった。この実験では、特に、日本語訳と可算性判断の関係性に注目しており、英語名詞が可算の場合と不可算の場合で日本語訳が異なる場合と、可算・不可算に関わらず日本語訳が同一である場合、この2つの場合における可算性判断に焦点をあてた。可算と不可算の場合で日本語訳が異なる英語名詞は、日本語訳の違いで可算性を区別できるため、可算と不可算で同一の日本語訳を持つ英語名詞よりも、その可算性判断が容易になるのではないかと予測した。可算・不可算の両方の場合で使用できる英語名詞109語を実験対象語とし、そのうち59語が可算と不可算で同一の日本語訳を持つ英語名詞、50語が可算と不可算で異なる日本語訳を持つ英語名詞であった。43名の日本人大学生が実験に参加し、英語名詞の可算性評価から行うグループと日本語訳の可算性評価から行うグループに分かれて実験を行った。分析の結果、可算と不可算の場合で日本語訳が同じ場合、日本語訳が異なる場合の両方で、英語名詞の可算性判断とその日本語訳の可算性判断の間に正の相関があることが分かった（日本語訳が同じ場合： $n = 59, r = .819, p < .001$ 、日本語訳が異なる場合： $n = 50, r = .407, p < 0.01$ （可算名詞）、 $n = 50, r = .398, p < 0.01$ （不可算名詞））。この結果は、どちらの場合においても、日本人学習者の英語名詞とその日本語訳の可算性判断は互いに一致していることを示してい

る。本研究では、この結果を、主にマルチコンピテンスの観点から考察した。マルチコンピテンスとは、多言語を扱う人の頭の中にある各言語の知識は統合した全体的な1つのシステムとして機能している、という考え方である。本実験の場合、日本人学習者にとって「名詞可算性」という文法特性は英語のみに関わる知識であるが、日本語には本来存在しない「日本語名詞の可算性」について考えるとき、日本人学習者は統合された知識の中から、英語を頼りに「名詞可算性」についての情報を引き出したのではないかと考えられる。この考察では、英語名詞の可算性が日本語訳の可算性判断に影響した可能性を示唆している。したがって、この実験結果からは、日本語訳の相違が英語名詞の可算性判断を容易にする、という仮説は証明されなかった。しかし、可算と不可算で日本語訳が異なる語の半数程度（100語中54語）は、日本語訳が示す可算性と日本人学習者の可算性判断が一致していた。これらの日本語訳は、英語名詞の可算性を判断する手段として役立つ可能性があると言える。英語教育において、日本語訳を名詞可算性の学習に取り入れるためには、日本人学習者が名詞の可算性を感覚的に理解できるような日本語訳を適切に選んでいく必要がある。

2つめの実験では、日本人学習者を対象に、名詞可算性と英語冠詞学習の縦断的な学習効果を調査した。前述した通り、日本人学習者が英語冠詞の習得を苦手とする原因は、名詞可算性の概念を十分に理解していないことであり、この問題は、日本の英語教育で長らく採用されてきた冠詞指導法にあると考えられる。従来の冠詞学習アプローチでは、「数えられる」「数えられない」という概念が説明されておらず、どのようにして名詞の可算性を判断するのか、という冠詞使用の前提を提示していない。そこで、本実験では、英語冠詞システムを説明するための新たな理論的基盤として、認知言語学の視点から「個性性」と「境界の明確性」という概念を採用した。この理論は、名詞の可算性は指示対象の境界線の有無やその個性性によって決まる、というものである。近年、学習者の認知的側面に注目が集まったことで、認知言語学的知見を取り入れた言語学習についての研究が増えており、多くの先行研究が認知言語学的アプローチの有効性を報告している。英語冠詞学習に認知言語学的知見を取り入れることで、日本人学習者が従来の冠詞学習で得た知識とは異なる、新たな知見を提示することができると考える。この実験では、従来型の学習アプローチと認知言語学的アプローチを用いて長期的な冠詞学習トレーニングを実施し、名詞可算性の理解と冠詞使用に対する学習効果を比較した。さらに、英語名詞の抽象性にも焦点をあて、名詞の抽象性と可算性判断の関係性も検証した。実験は、事前冠詞テスト、冠詞学習トレーニング、直後冠詞テスト、遅延冠詞テスト、という手順で行った。実験で使用した英語名詞は、可算・不可算の両方の文脈で利用できる語とし、具象名詞と抽象名詞を30語ずつ用意した。計60語の実験対象語のうち、半分（各15語ずつ）は冠詞テストのみに出てくる単語であるが、残りの30語は冠詞学習トレーニングでも使用した。冠詞テストは、無冠詞を伴う名詞句（名詞を不可算語と判断）と不定冠詞を伴う名詞句（名詞を可算語と判断）の二者択一式とした。実験参加者は54名の日本人学習者（分析対象は52名）で、従来型学習アプローチのグループと認知言語学的アプローチのグループに分けて、冠詞学習トレーニングを受講してもらった。冠詞学習トレーニングは、学習者が携帯電話もしくはパソコンを用いてインターネット上で受講する個人学習の形式とした。冠詞学習トレーニングを終えた後に直後テスト、その4週間後に遅延テストを実施した。データ分析では、多様なデータを1つの統計モデルに組みこんで分析する「一般化線形混合モデル」という統計手法を採用した。変量効果は、観測データに影響を与える可能性がある、被験者の個人差と実験対象語の個性差とした。また、固定効果は「学習アプローチ」「冠詞テスト」「名詞の抽象性」「名詞可算性」「対象語の学習の有無」の5つとした。分析の結果、冠詞テストの正答率において、従来型アプローチグループと認知言語学的アプローチグループの両方で学習効果が認められた（事前-直後テスト： $\text{estimate} = 0.52, SE = 0.14, z = 3.81, p < .001$ ；事前-遅延テスト： $\text{estimate} = 0.80, SE = 0.12, z = 6.45, p < .001$ ）が、グループ間の有意差は見られなかった。したがって、本実験の結果からは、認知言語学的アプローチの優位性は証明されな

った。グループ間の差が見られなかった原因として、既に参加者にはある程度の英語冠詞の知識があったことや「境界線の有無」という曖昧な概念を理解する難しさ、認知言語学的知見の内在化には時間がかかる可能性、などの点が挙げられる。さらに、分析結果からは、名詞の可算性、抽象性といった要因間の交互作用が認められ、特に、名詞の可算性は冠詞テストの正答率に大きな影響を与えていることが明らかになった。不可算と判断するのが正解となる語は、トレーニング直後では高い学習効果が見られ、飛躍的な正答率の上昇を示したが、その学習効果は遅延テストまで持続しなかった。一方で、可算と判断するのが正解となる語については、トレーニング直後の正答率は不可算語よりも低かったものの、遅延テストまで継続した学習の定着が見られた。この結果は、英語名詞の可算性判断において、可算語の判断よりも不可算語の判断の方が日本人学習者にとっては困難であることを示しており、先行研究においてもこの点は報告されている。

名詞の可算性は英語冠詞システムの基底にある重要な要因の1つであり、英語冠詞を適切に使用するためには、この概念の理解が不可欠である。本研究は、母語に名詞可算性という文法特性を持たない日本人学習者が可算性の概念を理解する方法として、日本語訳と認知言語学的アプローチの可能性を検証した。実験結果が示すこれらの効果は決定的なものではなく、英語教育における実用性についてはさらなる研究が必要である。